

## コミュニティ福祉学部での22年間

三本松 政之

(立教大学名誉教授/元コミュニティ政策学科教員)

この3月に22年間お世話になったコミュニティ福祉学部を退職しました。1998年の開設時に立教に着任し、あっという間の時間でした。基礎となる学部のないところに全く新しく作り出し、教員も他大や他学部からの先生方が寄り集まりました。また開設時1年目は学生も1年生だけだったので、自分の担当した基礎演習のクラスのメンバー以外でも顔と名前が一致する人たちがいました。先輩のいない学部で、ゼミの運営なども学生と教員がいっしょになって作り上げていくという長い大学教員生活のなかでも、なかなか経験できないことを体験させてもらいました。

私は、開設の2年前の1996年から非常勤調査役という肩書で、コミュニティ福祉学部の設立に関わらせていただきました。その意味では24年間コミュニティ福祉学部に関わらせていただき、関正勝先生、福田清蔵先生、高橋紘士先生とカリキュラムづくりや文部省（当時）への申請書類の作成などをしてきました。振り返るとその後も、坂田周一先生と2002年の大学院の新設の作業、2006年の福祉学科とコミュニティ政策学科への改組などにも携わってきたので、22年間という時間のなかで何となくいつも新しいことに取り組んでいたように思います。同時にコミュニティ福祉という新たな領域について結局、退職をするまで問い続けてきたような気がします。『新・コミュニティ福祉学入門』（2013年、有斐閣）『コミュニティ政策学入門』（2014年、誠信書房）の編集にも携わらせていただきました。「まなびあい」のシンポジウムでもコミ福20年の振り返りを行ってきましたが、コミュニティ福祉の持つ可能性についてさまざまな機会に今後も論じていただき、新たな課題に取り組み、さらにコミ福が発展していくことを願っています。

立教の教員としてありがたかったことは研究環境が整備され、個人研究費、海外研究費、とくに科研費申請の支援が手厚くされていたことです。1999年から2001年の「社会福祉非営利組織の組織原理とその運営実態についての動態的研究」（基盤研究（C））、2005年から2008年の「複合的多問題地域にみる社会的排除の

---

構造理解とその生活福祉支援に関する比較地域研究」(基盤研究 (C))、2009 年から 2013 年の「移住生活者の生活支援と移民政策における福祉課題の位置づけに関する日韓比較研究」(基盤研究 (B))、そして 2015 年から 2017 年の「韓国の社会的バルネラブルクラス支援にみる実践変革型コミュニティ形成に関する研究」(基盤研究 (B)) と 4 つの科研費の研究に代表者として携わることができました。

これらの科研費の研究を進める中で韓国の調査を 10 年近く行うことになり、だいたい年に 2 回から 3 回の調査を毎年行うことができました。そのような調査ができたのは、韓国からの留学生の協力があつたからです。

私のテーマだった外国人労働者や多文化家族の人権、その支援に関わる研究のほかに、大学院の院生(留学生)たちとは、かれらのテーマに関わる調査にも同行し、自殺予防、セクシュアル・マイノリティなどの研究をすることができ、日本とは問題の所在や違う考え方について知ることができました。また院生の研究にとともに取り組むことは、私自身の視野や問題意識を広げる機会にもなりました。韓国の調査では外国人労働者や結婚移住女性へのさまざまな支援団体での調査を通じて、その根底にある人権認識を学ぶことができました。それらの団体に関わる人のなかには、1980 年代末の民主化抗争の経験を持つ人達が少なからずいました。闘いを通して勝ち取った人権認識が、外国から来た人たちへの支援につながったり、セクシュアル・マイノリティによる当事者運動にも影響をしています。これらの研究の成果を一緒に研究を行ってきた来た人たちと『多文化福祉コミュニティ-外国人の人権をめぐる新たな地域福祉の課題』(2020 年、誠信書房)という本にまとめることができました。

退職前の 4 年間は学部長職に就いたため教育、研究に専念というわけにもいかず若干のやり残し感があつたのも正直なところですが。そんな思いを持っているときに長野大学社会福祉学部でもう少し仕事を続ける機会をいただきました。こちらでも現在、大学院総合福祉学研究科の申請中であり、今は認可に向けて準備作業に取り組んでいるところです。新設が認められれば、こちらでもゼロからの出発になります。コミュニティ福祉学部・研究科での経験を活かしながら、新しいコンセプトの大学院に集う学生たちと新たな研究・学修の場をつくれればと思っています。

コミ福での 22 年間は、学部・研究科のメンバーの同僚・学生だけではなく、多くの事務職員の方々のご支援があり退職まで、研究と教育に取り組むことができました。ほんとうに感謝しています。